

琉球大学学術リポジトリ

イランの編み靴「ギーヴェ」の製法について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2013-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Iran, Looped needle, Knitting, Shoe, Cotton 作成者: 片岡, 淳, Kataoka, Jun メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26597

イランの編み靴「ギーヴェ」の製法について

片岡 淳

Making of the traditional “Giveh” shoe in Iran

Jun KATAOKA*¹

ABSTRACT

Giveh (/GI:VE/) is a kind of shoe in Persia, Iran, the production centers of it in Kermanshah province. Giveh is made up of two parts: sole and upper. The sole is rubber or recycled cotton cloth ox-hide reinforcements, the upper consists of the varied knit technique, not weaving, not silk. Looped needle - netting is a kind of sewing based on loops which can be combined in various way.

Keywords : Iran, Looped needle, Knitting, Shoe, Cotton

はじめに

中近東の国イラン、正式名イラン・イスラム共和国は、日本の国土の約4.4倍に7.500万人程の人々が暮らしている。宗教はイスラム教シーヤ派、キリスト教、ユダヤ教、ゾロアスター教等がある。標高が高いため、寒暖の差が激しく、ペルシャ湾を除くほぼ全域で寒さが厳しいが日本と同じく四季がある。砂漠気候やステップ気候が大部分だが、カスピ海沿岸のラシュトなど地中海性気候であり、年間を通して湿潤な気候であるため、稲作や養蚕が盛んである。

染織については、ペルシャ絨毯やキリムという綴や錦やピロード織物、ペルシャ更紗など世界的に有名である。また、アケメネス朝ペルシャ帝国の都ペルセポリス (*Persepolis*) 現代ペルシャ語ではタフテ・ジャムシード (*takht-e jamshid*) と呼ばれ、ダレイオス1世が建設した宮殿群がある。紀元前331年、アレクサンドロス大王の攻撃で破壊され、廃墟となる。イスファハーン

(*Esfahan*) にあるイマームモスク (*Meydan-e naqsh-e jahan* 世界の肖像の広場) などの世界遺産が有名だ。イラン全土で文化遺産は16件ある。

我が国にも深い関係があり、正倉院御物の「白瑠璃碗」や「犀円紋錦」などササン朝ペルシャで作られたものが今も正倉院に伝存している。

人々の交流もあり、『続日本紀 卷第十二』聖武天皇 天平八年には唐の人三人とともに波斯(ペルシャ)の一人らは天皇に拝謁している。

しかし、ギーヴェという編み靴については全く知られていない。

「ギーヴェ」という編み靴との出会いは、2002年9月日本織物文化研究会(帝塚山大学植村和代会長)第三回イラン染織調査旅行に同行したときだ。イスファハーンからナイーンそしてヤズト近郊の村にギーヴェを作っている老人宅を訪ねたことが始まりだった。調査地は、ナイーン、ヤズド、ケルマーン、テヘランを訪ねた。翌年2003年12月M6のケルマーン州バム大地震では、4万人もの犠牲者が出た大惨事に見舞われた。その後、2006

*¹ 美術教育教室 教授

年9月イスファハーン、シャルレコルド、シラーズ、ペルセポリス、テヘランを調査した。2007年9月の旅は、ケルマンシャー・サナンダジ（旧名セネ）・タブリーズ・ラシュトに、2011年9月はテヘラン、イスファハーン、カシャーンの街を訪れ、ギーヴェについては計4回の調査を行なうことが出来た。このギーヴェを調べて今年で11年が経っていた。初めてのイランの旅で見た古タイヤを利用した靴底のギーヴェのほか、甲部や底部にそれぞれの土地の人々が使うギーヴェに違いがあることが少しずつ分かってきた。本稿では編み靴ギーヴェについてその制作方法と種類について報告する。



写真1 初めて出会った編み靴。古タイヤを利用した靴底。甲部にはダイヤモンドの柄が3つ編み出され、切り替えにフリンジがついている。踵に革張りが施されている。(tupasneh) 踵を踏んで履く場合もある。ヤズド近郊の村にて購入。

1 ギーヴェとはどういうものか。

乾燥地帯のごつごつした岩肌や瓦礫の上を歩くのに最適な靴である。耐久性のある布製の靴底に綿糸を針で編物した甲部からできている。ギーヴェは大きく分けて3つの部分と工程に分けることができる。一つは、靴底作り・甲部作り・底部と甲部を縫い付ける工程に分けられる。しかしこれらの分業は制作地や年代によって少しずつ変化がある。昨年2011年9月のテヘランに暮らすケルマンシャー出身の靴編み職人は靴底から甲部まで靴を作り上げるといい、従来3人の職人構成から少しずつ変化してきているものと思われる。

歴史については、『ペルシャの伝統技術 風

土・歴史・職人』に次のように書かれている。

「ギーヴェ作りという地味な技術の発達過程については、ほとんど知られていない。1105年に歴史家イブン・アルバルヒーは、ファールス地方のグンディジャー（現代のジャミーレ、Jamileh）がギーヴェ製造業で有名であったと述べている。[Le Strande, 1903 p69]。また、

その産業は、1340年に地理学者モストウフィーがそこを訪れたときにも依然として栄えていたという。今日、イスファハーンとシラーズの間の高原に位置するアーバーデ産のものである。」

2 靴底作り

靴底は木綿の古シート (*kohnh*) を約2.5cmに細長い帯状に裂く。それらの帯状の布の上にキャティラという糊 (*katireh*トラガントガム) を塗る。両縁を中心に向かって折り、さらに折る(折紐)。次に砧 (*mosteh*) で叩いて平たくする。これらを靴底の高さまでいくつもならべて、万力で締め固く整える。その両側と中央に平らな突き針で穴をあけ、1.75cm幅の平たい石灰で靴した牛の皮を穿つ。そして折紐で作られた靴の側面をナイフで切り整える。踵と爪先に山羊の角に穴をあけた物を用意して、水で濡らした革紐で靴底をさらに締め付けて布を強靱にする。

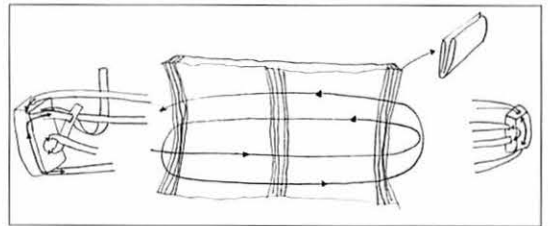


図1 靴底の穿ち方。踵と爪先には山羊の角の補強をつける。

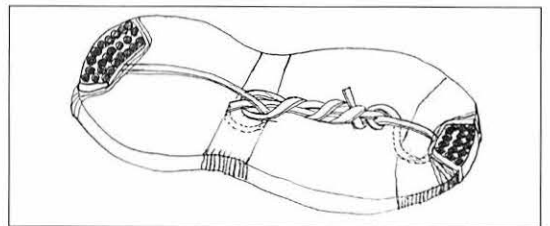


図2 さらに靴底を強くするために図2のように水につけた革紐を靴の上下に通して縛り上げて靴をU字に曲げて乾燥させる。さらに乾くと、木槌で叩いて平らにする。使う時はこの靴底の面のみ紐を切って履く。

3 甲部作り

素材は木綿片縫り糸（nah 10番Z撚り単糸20本S撚り）10/20の木綿布を使って大針で編んで作る。

この他の靴底には木綿布の替わりに使われなくなった古タイヤを靴底にする。木綿布を使ったものよりも安価である。イスファハーン近郊で見かけた。写真1参照。

まず、甲部に山羊の黒い毛Z撚り単糸を四本S撚り合糸した糸と羊毛の同様の糸を使い、一目置きに柵糸のようにアウトラインステッチをする。

つぎにアウトライン ステッチ1目にブランケット ステッチを3～4目する。

この目に針編みを行なう。最後に底と甲部のところを4段アウトライン ステッチを行い完成とする。

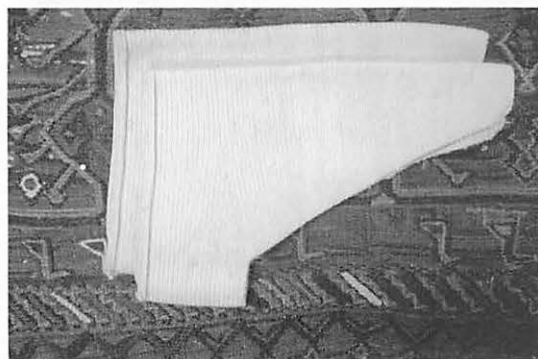


写真2 ヤズド近郊の村にて。編まれた甲部。ケルマンシャーやコルディスタン地方以外では、このような甲部と底部を繋ぐ方法で作るところもある。

4 牛の生皮

石灰で鞣された牛の革を1.75cm幅に切りそろえた革紐を靴底の補強材として使う。この他に羊や山羊の明礬・塩鞣しや、牛、ロバ、馬の皮のタンニン鞣しの二通りがあることをケルマンシャーの近郊、イラク国境近くのジャバンルーベという村で聞き取りを行なった。

5 山羊の角と釘

男性用の靴の踵と爪先には山羊の角をつけて釘が打ち付けてあり、女性用にはない。この靴を履くと、歩くたびに音が鳴り、男性が近づいてくる知らせの役割をするという。女性は来訪者が男性であることを確認するためである。ケ

ルマンシャーのクルドの人々の踊りには、互いに小指を絡めて円陣を作って踊る。踵や爪先を大地に打ち付けて軽やかな踊りをする時には必携の靴であるという。

- 6 針（suzan/giveh-bafi）長さ10cmほどのとじ針を使う。テヘランの国立博物館には骨針が展示してあり、このような針でも編物することが可能と思われる。ラシュトの市場にループ編みの垢擦り具が売られていた。

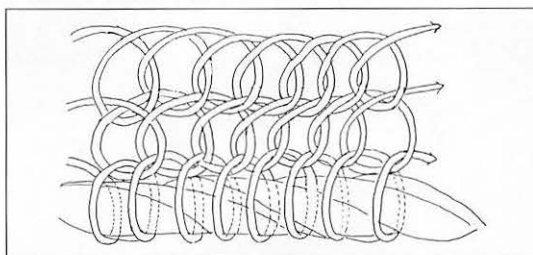


図3 甲部の立ち上がり針編みの組織

ブランケット ステッチまたはボタンホールステッチをまずおこなう。つぎにループド ニードル ネット編みをする。この編み方は、スウェーデンのストックホルム歴史博物館（Historiska museet, Stockholm）や南の Lund Kulturhistoriska museet）、デンマークのコペンハーゲンにはミトンの手袋が、ドイツのベルリンの博物館（the Staatliches museum in Berlin）には絹製の帽子などが展示されていた。『ANCIENT DANISH TEXTILES FROM BOGS AND BURIALS』P310にはエジプトに同様の技法があると述べている。このほかに南西ヨーロッパやアイスランド、南米ペルーにあるという。

7 爪先製作用金具型



写真2 2011年9月撮影。靴の爪先には写真のような金具をはめて形を整えながら編む。このような道具を使うようになったのは最近だという。

8 甲の部分 木綿糸

S 撚り単糸20本をS方向にさらに強く撚り合わせてものを使う。

9 糸継ぎの仕方

側面・甲部の木綿糸の撚り継ぎの方法は独特で、まず、10本ずつ二つに分け、それぞれの糸端を針で繊維を十分ほぐしておく。



写真3 2011年9月撮影。編まれた糸が短くなると、撚りをほぐき、繊維をさらにほぐす。

繋ぐ糸も同様の状態にしておき、二つに分けた糸束と、新しい糸を撚り合わせて繋ぐ。そこに短い方の残りの糸束を撚りのかかった糸の間に針を入れて何回か入れて繋ぎ合わせる。このような糸の繋ぎ方は南米ペルーのインカ裂に多くみられる。沖縄の芭蕉糸の繋ぎ方は機結びと撚り継ぎである。

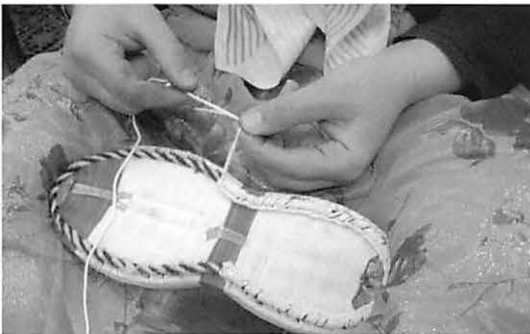


写真4 2011年9月撮影。左手の糸と右手の糸はほぐされ、撚り継ぎをする。すると結び目が無く履き心地がよい。

10 部位の名称と工程

コルディスタン (Kordestan) 州マリーバーン (Marivan) オロマン (Oroman) 地区 River (Keshavarzi) 市 Hajij 村出身の人々に受継がれている靴の編み方の手順は以下の通りである。

Benpark 靴底の上部輪郭に添ってアウトラインステッチを施す。(Isfahan) あるいは、写真のように黒い山羊の毛と白い羊の毛を交互にアウトラインステッチした上に木綿糸で細かくブランケット・ステッチを施す。写真4参照。

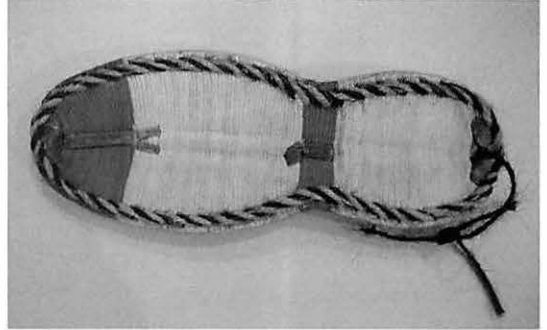


写真5 2011年9月撮影。白と黒の空糸は魔除けの意味がある。

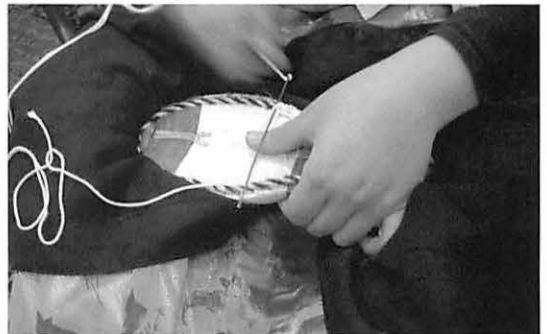


写真6 2011年9月撮影。ブランケット (またはアウトライン) ステッチを一目に3~4目刺す。

① La Upper・Midsole側面を編んでいるところ。



写真7 2011年9月撮影。

② Pashene Heel 踵 (かかと) の立ち上がりを編む。

- ③ Sakar Toe 靴の爪先を編む。
- ④ Damghar 甲部前方立ち上がり部分を編む。
- ⑤ Hatirn 縁取りをする。
- ⑥ Shiraze 靴底と編み部のつなぎ目を改めて針編みをして仕上がり。
- ⑤ Damghar Tongue 爪先の上
- ⑥ Hatirn 腰と舌を結ぶ縁編み
- ⑦ Shiraze Welt アッパーと底を編み飾る。

靴底 (that, siveh) Outsole 使用済のシートなど (kohneh) を 3 cm ほどに細く裂き、三つ折りにしてキャティラというアザミ科の植物の根からとれる滑り気のある液につけてかたち作る。真ん中に牛の生皮を穿って補強する。

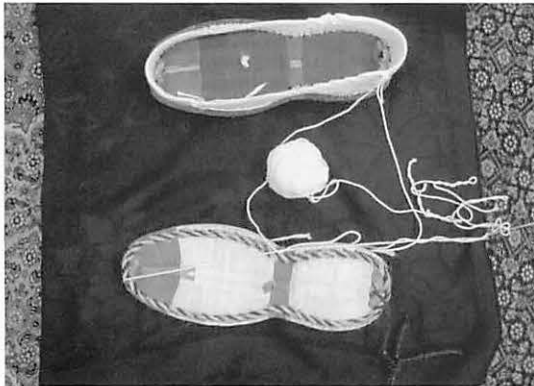


写真8 2011年9月撮影。底部の表と裏。甲部を編み始めるところ。

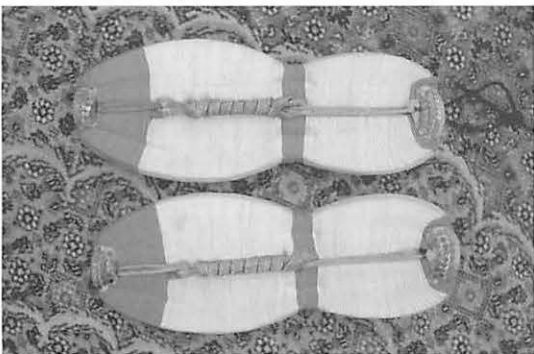


写真9 2011年9月撮影。靴の底。

これは甲の部分を作り終わると切り落とす。これで履くことができる。つま先とかかとは山羊の角を取り付け、底の部分には釘を数本打ち付ける。これは踊りの時に大地を鳴らす役目をするちよ

うどタップダンスのボール (爪先側) とヒール (踵側) にチップがあるのと同じである。

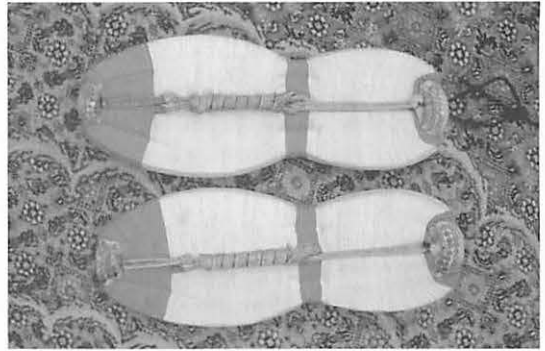


写真10 ケルマンシャーの町中のギーヴェ工房で購入したもの。甲のところに飾り紐がついている。

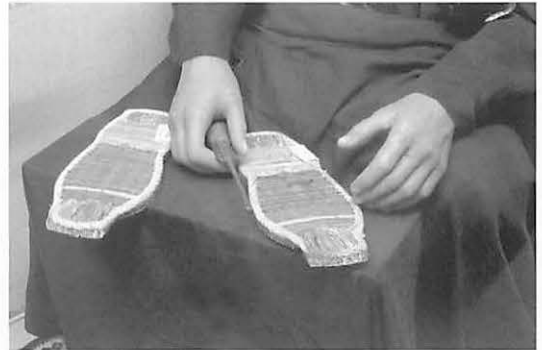


写真11 靴底の様子 カシャーン市内フィン庭園博物館にて。

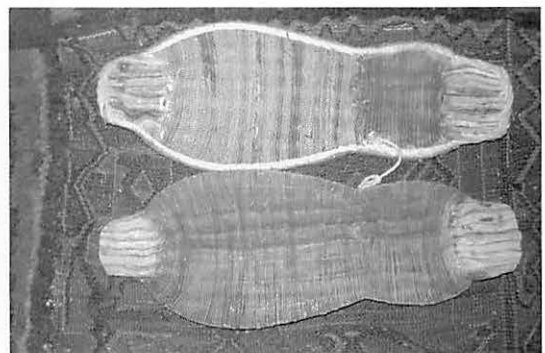


写真12 イスファハーンからシラーズに行く途中の街で購入した靴底。

11 加工

キャティラ (katireh) といわれる滑りのある糊を靴底そして甲の部分にまんべんなく塗る。これはアザミ科の植物の根から採るという。しかし、

帰国しよく調べてみると確かに原産国はイランであったが、アザミ科ではなく、豆科の植物から得られる分泌物であった。

中東山岳地帯に広く自生する豆科の低木トラガント (*Astragalus gummifier* Labillardiere 種) から採取する分泌物トラガントガム (*Tragacanth gum*) である。用途は増粘安定剤、乳化剤、製造用剤で、成分は多糖類である。アラビアガムともいう。チューインガムやチーズケーキ・シュガーアートに使われるほか、シャンプー・口紅や化粧品乳液などに使われている。イランではペルシャ更紗の仕上げにこのガム (現地ではキャティラという) の水溶液を塗り、光沢と張りを出す。またイスファハーンからナイーンそしてヤズドに向かう途中の村クオーバイ村でアバブといわれるラクダと羊の毛を緯糸に経糸は木綿糸を使った平織物の仕上げにこのキャティラを使う。起毛した後、これを塗り、アイロンをかけて光沢を出す。

コルディスタン州マリーバーン出身の編み手からの聞き取りでは、ギャバン (*Gavan*) といわれる植物の樹液を塗るという。

用途 夏用の靴 岩肌が険しいところではこの靴を履くと滑らず、通気性も良い。男性の踊り用の靴としても使われ、親指と小指を互いに絡めて円をつくり踊る際、爪先と踵を大地に叩き、軽快な音を出すため、山羊の骨に釘を打ち付けている。写真9を参照。

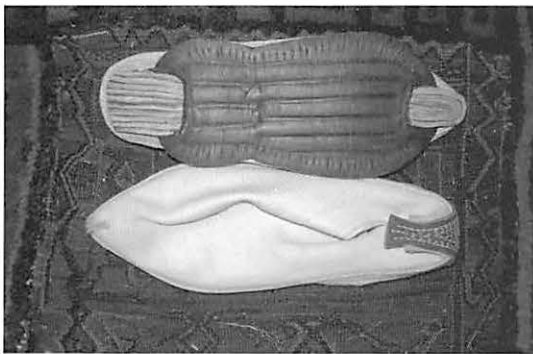


写真13 シャルデコルドの街で購入したギーベ

踵と爪先に牛の生皮を釘で打ち付けることによって、踊る際に軽やかな音を出すことが出来る。さらに、日常では、男性が女性の家に近づく時に合図としてこの細工が音を出す。

12 ギーヴェの種類について

これまで調査してきた採集地は以下の通りである。

- 1 ケルマンシャー (Kermanshah)
- 2 ヤズト (Yazd) 近郊
- 3 バフティアリ (Bakhtiari) 州シャル・デ・コルド (Shar-e Chaharmahal)
- 4 イスファハーン (Esfahan) 近郊

調査をしていくと、イランに住むクルド人が多く住む地方や街の靴屋で見かけた。たいてい、すでに何百足と作った年季の入った職人がほとんどであった。例外としてケルマンシャーからサナンダジに行く途中のイラク国境近くの街で若い青年がふたり工房兼店を構えていた。日中のみの撮影が安全ということで、マスクをつけ、深く帽子をかぶり、盗賊が出ないように午後3時には帰路についた。



写真14 テヘラン市内のバザール近くにあるゴレスターン (王宮) 博物館施設内部にあるペルシャ式庭園の噴水より、ここには7つの博物館があり、そのうちのひとつ民族学博物館を撮る。館内にはイラン各地の民族衣装や伝統的な生活の再現などが展示されている。



図4 イラン地図

<http://www.freemap.jp/mapSearch.php?tage=イランより>

カスピ海とペルシャ湾沿岸を除いて、乾燥した土地であるため、木綿底の靴を履くことができる。ジルーという木綿の二重織の敷物もカシャーあたりのもスクや家庭に使われている。キリムという敷物の白色に木綿糸を使うことがある。羊毛はウールというよりもヘアーに近い光沢と強さがある。

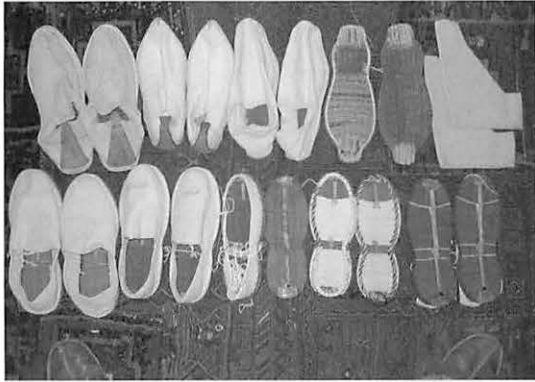


写真15 上段向かって左から、ヤズト（靴底はタイヤ）接合部は牛革を使用。上段向かって右が甲部。左から2番目がシャルデコルド産、踵はヤズト産とほぼ同じ、ただしかなり編み目が細かく、キャティラを塗ってあるため光沢がある。踵の飾りと牛革が甲部と底部の境目に使われている。真ん中イスファハーンからシラズに向かう途中の街で購入。靴底も同地産。爪先と踵が狭まっている。下段左からケルマンシャー産。左から2番目はコルディスタン、マリーンバーン産。一番右はケルマンシャーから北西サナンダジ（旧セネ）から西のイラク国境近くの街で求めたギーベ。



写真16 Summer Cotton Shoe カシャー市内にあるフィン庭園内にある博物館にて。高低差を利用した噴水がある夏の離宮の施設に展示されていたギーヴェ。靴底と甲部を縫い付けるために牛の生皮が縁に縫い付けられている。また、キャティラを塗って光沢をもたせている。踵には赤く染められた革が縫い付けてある。



写真17 シラズ地方の男性用靴ギーベ
<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?p=parchment&stype=0&dtype=1>より

イラクにも同じような甲の編み方をした靴がある。



写真18 子供用イラクの編み靴。
ラクダの皮底に甲は羊毛編み。
http://www.shoesornoshoes.com/index.php?page=ethno_thumbs&pagenum=7#

ギーヴェは忘れ去られた履物と思っていたが、イスファハーンのバザーで、改めてその履き心地の良さが見直されて、若い人も履く姿を多く見かけるようになった。伝統的な針編みの甲部の靴がある一方、かぎ針編みのギーヴェもある。どちらが伝統的であるかははっきりとしていないが、12世紀にはすでに作られていたことは明らかだ。かぎ針編みはエジプト・シリアで始まったとされているが、詳しい報告がまだ公にされていない。手間のかかる方法は針編みであるため高価である。



写真19 イスファハーンのイマームモスクに近いバザールにて。2011年9月撮影。



写真20 一見するとギーヴェに見えるが、伝統的な針編み技法ではなく、かぎ針編みのコマ編みで作られたギーベである。イスファハーンのバザールにて。2011年9月撮影。

まとめ

琉球大学教育学部に赴任した1988（昭和63）年頃は北欧ノルウェーの堅機（The warp weighted loom）について調べていた。デンマークのコペンハーゲン・ノルウェーのベルゲンやトロムソそしてスウェーデンのストックホルム野外博物館、フィンランドのヘルシンキ国立博物館・イナリの野外博物館等の堅機について調査していた。堅機には海岸沿いに暮らす Sea Same と内陸部に暮らす Skarp Same の堅機に大別することがわかった。ドイツ・オーストリアのハルシュタット文化、そしてギリシャ文明まで遡ることが分かった。

ノルウェー北トロムソ博物館で見たサーメ人の羊毛のチーズ濾し編み「Harsi fra」の編物とイランの古代国家ギーヴェの編み方が同じであることが分かった。世界各地に編みものがあるが、それを構成する糸の本数による分類をこころみた。

各地に残る編物の伝播や変遷については膨大な資料の整理と地域や歴史について考察しないとまとめることができない。ある編み物をみた人が試行錯誤で作り上げ、その技術が普及した場合、変遷したということはいえない。

図1にみられるように、ギーヴェの靴底は踵と爪先に山羊の角の補強はあるものの、その穿ちは底に経四本の紐が貫通しているものと180cm程度の紐を両足の親指にかけて輪状として、紐や藁などの繊維をほぼこれに直角に編み込んでいく我が国の藁草履作りの構造とほぼ同じである。草履は奈良時代に大陸から伝来したといわれている。天平勝宝四（752）年の大仏開眼会にはペルシャやインド、中国、韓国から二万人もの人々が参加したという。当然、奉獻品や身の回りの物といっしょにもたらされても不思議ではない。さらに捻り足袋との関連も興味深い。

技術というものは、歴史的な時間軸と国、政治経済区分ではなく、地理・文化区分を常に考えておかなくてはならない。そしてダーウィンの進化論では、二つの個体は必ず競争し、優れたものが勝つという考え方だ。しかし、私たちの世界はいろいろな技術が共に生きている。高谷氏が『多文明世界の構図』の中で取り上げている今西錦司の主張する「生態理論」を提唱しているがしごく納得出来る。生産性と便利さを追求してきた私たちは、優劣を単純な条件で追認してきた。世界はそんなに単純なものではない。「一つの全体」という仏教の世界観と同一の宇宙観でこの世をそして教育を改めて観る時期に来ている。生産性を追求して安価にモノは手に入るが、耐久性が劣り、補修することよりも新しいモノを購入する方がよいという考えが支配しているが、大量のゴミが出る。

100万年前から私たちは道具をつくり、利用してきた。現在は道具を多くの人の手でつくり、使うという作り手と利用者が余りにもかけ離れている。少し修理をして使うことはほとんど無くなってしまった。人間足らしめることのひとつに物の交換があげられるが、その距離があまりにも大きくなってしまった。身につける物、食べるもの、住む建築も気密性と外気や外光を遮断する方向へ行った。自然の脅威から身を守ることは建物には必要であるが、自然の空気や風、光を感じる距離

感もたいせつである。

一針一針縫い編みして出来上がるひとつの国をもたないクルド人の文化のほんの少し理解出来た。

ものづくりという生産者と使用者の距離がない工芸の世界や図工教育など改めて見直し、生産性と石油の消費異存にならない未来の生活を暫時模索して方向転換をしていく必要が迫ってきている。

明治時代から西洋の教育や価値観が入り、日本独自の文化、「美術」とか「工芸」ということばを造語する前のものとの関わり方を今一度確認する必要がある。自己表現と新しい物がすべてよいという価値観のみで美術工芸を判断して良いのか。樋口豊次郎が『新装板 工芸の領分 工芸には生活情緒が封印されている』のなかで「粋」「通」「洒脱しゅだつ」「諧謔かいげやく」「韜晦とうかい」など芸術的情緒としどのように解釈すべきかわからなくなってきたと述べている。西洋文明を受け入れることはよいが、日本古来のたとえば飛鳥時代から社寺を建築してきている金剛組は1423年も続いている。温泉宿や調味料など1000年も続く企業はヨーロッパには見当たらない。

工芸教育は現代に活かせるものづくりと歴史に置き忘れられようとしているものを記録しておく、また改めて注目するきっかけをつくることも役割としてある。これから『Honarhayeh Bumi Dar Sanayeh Dasti Bakhtaran (イラン西部バクタランの手工芸)』を英語と日本語で知人の力を借りて翻訳本を出すことにした。全く知られていないクルドの靴「ギーヴェ」をより多くの人々に紹介し、文化を残す仕事をつづけたい。

謝 辞

ギーヴェを調査するに当たって常に同行してもらい、通訳をしてくれた Kazam Aripur 氏、クルドの編み手と使用者を探して実演の手配と場所の提供をしていただいた Dr. H. Javadi 夫妻、Pasha・Amin・Sheidah。気持ちよく取材に応じていただいたギーヴェ職人の多くの皆様、目的地まで往復6時間も運転をしていただいた運転手の方々。このように多くの時間と人の助けに支えられて調査ができた。最後に、4回ものイラン調査旅行をいつも暖かく見守ってくれた研究室のス

タッフそして家族に感謝したい。

参考文献

- Honarhayeh Bumi Dar Sanayeh Dasti Bakhtaran (イラン西部バクタランの手工芸)
著者 Mohammad Jazmi, Seyyed Ali Asghar, Shariat Zadeh, Asghar akarimi, Mohammad Mirshokrani. 出版 Markaze Mardom Shenasi. 出版 Farvardin 1363年
- ANCIENT DANISH TEXTILES FROM BOGS AND BURIALS A *Comparative of Costume and Iron Age Textiles* Margrethe Hald The National Museum of Denmark
- The Traditional Crafts of Persia ペルシャの伝統技術 風土・歴史・職人 Hans E. Wulff ハンス・E・ヴルフ著 THE M. I. T PRESS Massachusetts Institute of Technology 大東文化大学現代アジア研究所監修
- 多文明世界の構図 超近代化の基本的理論を考える 高谷好一著 中公新書133
- 新装板 工芸の領分 工芸には生活情緒が封印されている 樋口豊次郎 美術出版